円環の空

ふくよかな雲が周囲を縁取る
円形の青い空が頭上に
閉塞感にこそ展開を見る

言語のひとつひとつの重量が
質量のない感覚までをも
大気から静かに降下させてゆく

水蒸気を要素とするカーテンを
そっと引く者がある
覗き見る者、喘ぐ者たちの気配

引き伸ばされた遅延の時間がよどむ
僕は何物も捉えることはないだろう
しかしすべてを身にまとうことはできるのだ

さらには、あの円環の空をその掌に映し
感情を包み込む吸い取り紙の中へと
その一滴を沁み込ませることも

あの雲どもは次第に覆いつくしてゆくであろう
それはおそらく彼らの義務である
また地上へと視線を落とすことが
私をして、次なる部屋へと赴かしめることとなろう

(2001.9.14)